

Book Review



歯根膜による再生治療 インプラントを考える前に

下地 勲 著

● ● ●

Reviewer

下川公一

(北九州市・下川歯科医院)

A4 判, 218 頁
定価 14,700 円
(本体 14,000 円+税 5%)
医歯薬出版刊



昨年 10 月、『歯根膜による再生治療 インプラントを考える前に』という書籍が医歯薬出版株式会社より発刊された。筆者は以前から私が最も歯科医療人として敬愛し続けてきた臨床家の一人、下地 勲先生である。25 年近く彼の臨床論文に目を通して自分が行う臨床の参考にさせていただいてきた。その多くが天然歯を残すための工夫と経過観察に対するこだわりであった。それは、時代の流れのなかでインプラント治療が大々的に脚光を浴びてきた今でもなんら変わることはない。

本書をご覧いただければ一目でわかることだが、筆者はインプラント治療においても卓越した知識と技術、そして長期の術後経過を持ち合わせている臨床家である。にもかかわらず、普通であれば抜歯をして何の不思議もない歯であっても、それを何とか残そうと考える。そして、それが不可能な場合は、智歯はもちろん、埋伏歯でさえも何とか自家歯牙移植として利用し機能させる工夫と努力を惜しまない。一般開業医として日々そのような臨床を粛々と行い続けてきている、そのライフワークに同じ仕事に携わる者としては感心し、脱帽せざるをえない。

今回も本書から、私自身の残り少ない歯科医療人生の過ごし方に多くのヒントとやる気をいただいた気がする。

歯科医療人としての生き方は人それぞれではあるが、本書に掲載されているすべての症例が、われわれに求められている患者さんに対しての誠意や良心、愛情に満ち溢れていることが何よりも嬉しい。われわれ開業医は、はじめは誰しも経験学として患者さんから多くのことを学び、失敗経験を積み重ね、その治療経過を見続けながら成長していく。そのうち、過去にみずから行った治療結果の善し悪しの理由がおのずから見えてくるわけであるが、その確認作業を科学的な根拠に基づくプロトコルとして自分なりに整理し、再評価する必要に迫られる。それを行うことこそが医療にたずさわる人間としての患者さんに対する責任であり、自分自身をさらに成長へと導くことになる。

本書を読むと、筆者の歯根膜という組織へのこだわりの源が発生学であることに驚きを覚える。歯根膜が有する外胚葉性間葉組織としての DNA が、口腔においてどのように機能し、生体防御と歯の恒常性維持の役割を担っているのか、そしてそのことを臨床のなかで、いかに安全かつ機能的に利用できるのかを、長期経過観察症例として表明した業績は大きい。一般開業医が、EBM として、結果にこだわりながら行ってきた歯科臨床記録の集大成

として、大いに評価できる。

それゆえ、本書に掲載されている症例を単に技術的な評価として眺め、感心してはあまりにももったいない。歯根膜という繊細で未分化間葉細胞を豊富に秘めた特異的な結合組織を、術前に健康な箇所と病んだ箇所に的確に鑑別し、どのような治療計画と術式で対応すれば、最も合理的かつ医学的か、それを実現した筆者の臨床のプロセスを読み取る訓練をしてみると面白い。それが可能であれば明日からの臨床へ良い結果としてつながるものと確信する。

現在、発売されて 6 カ月が経過しているが、今この書評を書く意義は、そのような思いで隅から隅まで本書を熟読し、本質を理解していただきたいからにほかならない。歯科医療のこれからのありかたや歯科医療人としての生き方が、いたるところにメッセージとして発信されている。

本書には、筆者がベーシックな基本理念のなかで、長年にわたってこだわり続けてきた、歯根膜という歯科治療の成果に特別な役割を担う結合組織への愛情が満ち溢れている。その生き方に共感を覚え大いなる感銘を受けた読者の一人として、この貴重な臨床歯科医学書を、ぜひ読者にすすめさせていただきたい。